

編者はしがき

いよいよ本全集も「生活篇」「生長の家」の生き方に入つた。本巻と次巻第十三巻の「生活篇」は、頭注版では「第七巻」として親しまれ、「生命の實相」全集中、最も多くの読者に影響を与えていた卷である。谷口雅春先生も「本篇は『生命の實相』全巻のうちでもっとも広い範囲の読者から歓迎された部分であつて、『光明の生活法』と題するポケット判の單行本ともなつているのである」(本書「はしがき」と述べられている)。

多くの読者の心を魅了する理由は、極めて具体的な人生の指針がストレートに示さ

れ、それが谷口雅春先生の圧倒的な迫力のあるご文章で綴られていることにある。

本巻には「生活篇」の前半九章が所収されているが、「朝の時間を生かせ」「朝らかに笑つて生きよ」「今を全力を出して戦いとれ」「背水の陣を布け」「深切の生活を生きよ」「常に善念を把持せよ」等の、誰にでも理解でき、直ぐにでも実行可能な項目ばかりである。世に限りなく「人生訓」「處世訓」があるが、本全集の「生活篇」ほど断定的で力強く、一点の曖昧さもない「人生論」はない。

それはなぜかと言えば、「真理」の把握の上に立つた「実生活への応用」であるからにはかならない。谷口雅春先生は本書「はしがき」で次のように述べられている。「本書は『眞理』を自己の実際生活に応用する武器たらしめんがための、最後の段階となるべき『いかに生活すべきか』の問題を取り扱つた『生活篇』であつて、次篇『觀行篇』(編註・本全集第十四、十五巻)とともに生命の実相の眞理を行的に展開せしめるためのものである」

この「生活篇」は、谷口雅春先生の個人雑誌として昭和五年三月一日に創刊された

「生長の家」誌がもとになつて編纂された。その創刊号に「生長の家」の生き方(1)と題して次のような項目が並んでいる。

1. 「生長の家」では朗らかに笑つて生きる。
2. 日時計主義の生き方。

3. 「生長の家」は礼拝主義で生きる。

この三編は本巻に所収されているが、昭和五年と言えば、「男は三年に片頬」と言われるほど笑いの価値は認知されていなかつた。そういう時代のただ中にあつて、谷口雅春先生はこう述べておられるのである。

「笑いはただその人自身を健康に愉悦にするばかりではない。快活な人は周囲に幸福と健康とを描いて歩く。明るい朗らかな深切な笑顔を向けられては何人も幸福にならずにはいられない。そういう人が医者であれば、患者は医者の顔を見るだけでよくなつたりするものである。

笑いの医療的価値はやがて一般にみとめられて来るであろう。もしこのことが一般

にみとめられ一般に利用されるようになるならば、病気の大半は医者も薬もなしに吹っ飛ばされてしまふに相違ないのである。」(三五頁)

「聰明な上役は、仕事の合間に下役の気を立てるような罪のない諧謔を飛ばす。能率^{リテラシー}を望む実際家もまた笑いの効果を知らねばならない。上手な教育家は生徒を時々ユーモラスな話で笑わせながら授業を進めて行く、それで生徒に喜ばれて却つて成績が好いのである。」(三六頁)

今や、「笑い」に医療的価値、教育的価値、実際生活上の価値があることは常識となつてゐる。「明るい」(日時計主義)ということも、善いところや美点を認めること(礼拝主義)も、今や大いに奨励され、だれもが実践を試みようとしている。

谷口雅春先生はなぜ時代を超えてこのような提唱ができたのか。一言にして言えば、それが「真理」から発せられたからである。本全集第一巻から第十一巻までに説かれた万古不易の「真理」は、その時代の流行思想などものともしない。「真理」にもとづく実生活上のハウツー(応用編)もまた、時代を超えて永遠に通用するのである。

「兄弟よ、私は苦しみに耐えよとは言わない。『生長の家』では苦しみに戯れるのだ。如何なる苦しみをも戯れに化するとき人生は光明化する」(二頁)

「朝の時間を利用するものは一日を生かすのである。毎日朝の時間を利用するものは生涯を生かすのである」(七頁)

「躊躇したり、グズグズしていて何になろう。躊躇逡巡は時間を見失うばかりだ。時間を見失うことは生命を見失うことだ。今よりも一層便宜なときが来るかも知れぬと思うな。今が、今与えられている可能に対しても一等便宜な時なのだ。『機会』という神様は前額にだけ髪の毛があつて、後頭部には髪の毛がないと言われている。『機会』の神様と正面衝突して、その神様の前額の髪をひつ掴め。これが生長の秘訣であるのだ」

(八五頁)

「頼みて『吾れ全力を出したり!』と自己を欺かずして言い得るものは幸いなるかな! 彼は神に祝福されるものである。神という『無限の力』のタンクより必要な力を与えられるものである。では諸君よ吾らは全力を出し切ろう。フラフラになつても倒れる

な。自分を甘く見るな。そんな弱い自分だと思うな」(九六頁)

読めば読むほど、滾々として内なる力が湧いてくるのが本巻の特徴である。これを草されたとき、谷口雅春先生は御年三十七歳であった。しかも、ここに掲げられた生活法とは決して机上の空論ではない、谷口雅春先生自ら実践されてきたことなのである。本巻が『生命的の實相』の中でも最も多くの人に読まれているのも決して故なしとはしないのである。

編者はしがき

平成二十七年一月吉日

谷口雅春著作編纂委員会